

他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響

筑波大学大学院(博)人間総合科学研究科 石川満佐育

筑波大学心理学系 石隈 利紀・濱口 佳和

The effect of other-esteem and self-esteem on self-expression

Masayasu Ishikawa, Toshinori Ishikuma and Yoshikazu Hamaguchi (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study was conducted to investigate the effects of other-esteem and self-esteem on self-expression. Study 1, drawing on the concept of other-esteem advocated by Hwang (2000), developed a scale of other-esteem consists of 11-items through principle component analysis. The results of analysis indicated that the scale has sufficient reliability and validity. Taking both other-esteem and self-esteem as inner traits that produce overt behavior, Study 2 examined the effects of three variables on self-expression (assertive expression, passive expression, aggressive expression). The results indicate that both other-esteem and self-esteem are related to assertive expression, that passive expression is related with self-esteem, and that aggressive expression is related with other-esteem. Finally, some directions for future research are discussed.

Key words: other-esteem, self-esteem, self-expression

問題と目的

虐待, いじめ, 凶悪犯罪, 犯罪の低年齢化などが世間にはびこり, 対人関係が貧しくなっている社会において, 共感性, 思いやりなど道徳性に関する事柄の重要性が高まっている。一方で, 心理学の領域では, 精神的健康, 適応感などとの関連において, 自尊感情の研究が数多く行われている。自尊感情を測定するために一般的に使用される自尊感情尺度を作成した Rosenberg (1965) は自尊感情を「自己に対する肯定的または否定的な態度」と定義している。人間性心理学の立場でいえば, 自尊感情の高い人は自己を受容していて, 精神的に健康であると考えられる。実際, 質問紙を用いた関連研究では, 自尊感情は抑うつや不安, 絶望感といった不適応な感情の指標と負の相関が得られている (桜井, 2000)。さらに心理的なものへの影響だけでなく, 行動面においても自尊感情と関連した研究は古くから数多く行われている。例えば, ポジティブな面では, 自尊感

情と向社会的行動との関連が検討され (Midlarsky, Berger & Kilpatrick, 1981), ネガティブな面では, 逸脱行動との関連が検討され (Coopersmith, 1967), 最近では攻撃性と自尊感情との関連が検討されている (島井, 2001)。

自尊感情が高ければ, ポジティブな面が促進され, ネガティブな面が抑制されると考えられ, 自尊感情を高める運動が, アメリカを始め, わが国でも行われてきた。しかし, 近年, 自尊感情を高めることは, 攻撃性の抑制には必ずしも繋がらないことが指摘されるようになってきた (Baumeister, Smart & Boden, 1996)。

Hwang (2000) は, この指摘を受け, アメリカ文化における self-esteem の過度の促進を問題とし, “我々は, 他者との関係の中で生活するための新しい態度であり, 行為である健全な other-esteem を獲得する必要がある。”と述べている。他の研究では, other-esteem という用語は, 「他者からの知覚された自己評価」として使用されている (de Jong,

2002). しかし, Hwang (2000) は, 他者を受け入れる態度であると述べている. Hwang (2000) は, other-esteem について明確な定義を行っていないが, “全ての人間を, 尊重し, 受容し, 思いやり, 価値のあるものとし, 奨励すること”, “すべての人々の平等性を受け入れるという心的態度である”と述べている. さらに “other-esteem には異なる10個の側面がある” (Table 1) と述べている. 本研究では, Hwang (2000) の提唱する other-esteem の概念を参考にしながら, 個人の内側に存在する特性としての他者を尊重する側面を「他尊感情」とする.

他者を尊重する側面は, アサーション研究の領域においてもその重要性が述べられている. 自己表現にはアサーティブ (assertive), 非主張的, 攻撃的な表現の3つの側面があり (平木, 1993), その中でアサーティブな表現が最も適切な自己表現とされている. アサーティブな表現とは, そのときの自分の気持ち・考え, 相手の気持ち・考えを同時に大切にしていくことである. 日本におけるアサーション研究の展望を述べた用松・坂中 (2004) は, アサーティブな自己表現には, 自己尊重と他者尊重という2つの軸があると述べている. しかし, 用松ら (2004) は, 先行研究において他者尊重という視点を重視した研究は少ないと指摘している. 数少ない

研究の中で, 柴橋 (2001) は, 他者尊重を他者表現の受容ととらえ, 他者が率直に表現することを望む気持ちと定義し, 研究を行っている.

柴橋 (2001) は他者尊重の側面を自己表現の枠組みからとらえようとしているが, 本研究での他者を尊重する側面, つまり, 他尊感情は, 自己表現の枠にとどまらず, 個人の行動全般を支える内的特性としてとらえていくことにする. アサーティブな表現には, 他者尊重と自己尊重の2つの側面があり, 行動として外側に表出される自己尊重の側面を個人の内側で支えるものが自尊感情であり, 他者尊重の側面を内側で支えるものが本研究で明らかにしようとしている他尊感情であると考えられる (Fig. 1). 従来, アサーティブな表現を, 個人の内側で支える要因として, 園田・中釜 (2003) は自尊感情をあげており, 自尊感情を育てることが重要であると述べている. 自尊感情とアサーティブな表現の関連を検討した研究もみられる (塩見・伊達・中田・橋本, 2003). しかし, self-esteem の促進だけでなく, other-esteem を促進する必要があると Hwang (2000) が指摘するように, 自尊感情だけでなく他尊感情の視点を取り入れた研究を行っていく必要があると考えられる.

また, 他の自己表現である非主張的な表現, 攻撃

Table 1 Other-esteem の10側面

非攻撃的な (non offensive)	身体的・言語的に傷つけないこと. からかったり, 侮辱したり, けなしたりしないこと.
友好的な (friendly)	他者との間に友好的な関係を築くこと. 個人主義ではなく, 平和で, 社会的な関係を築くこと.
誠実な (courteous)	相手に失礼なことをしないこと. 列に割り込んだり, 話をさげざたりしないこと.
親切的な (kind)	他者が助けを必要としているときに助けること. 何かの見返りを期待することなしに助けること.
尊重する (respectful)	相手に敬意を示すこと. 相手がどんな立場であろうと尊重すること.
受け入れる (accepting)	他者の個性を認め, 受け入れること. 社会的, 文化的な独自性を受け入れること.
価値のある (valuing)	他者との関係を価値のあるものとする. 他者との関係の中に自分があると思うこと.
褒める (praising)	他者の努力や成果を認め, 喜ばすこと. 他者を批判することなく褒めること.
他者を奨励する (promoting others)	他者の目標や理想のために援助すること. 競争心や嫉妬心なしに, 他者の成功のために助けること.
許す (forgive)	自分の生活をよくするために, 他者を許すこと. 復讐しようと思わないこと.

注) Hwang (2000) による other-esteem の10個の側面の記述をもとにまとめたものである

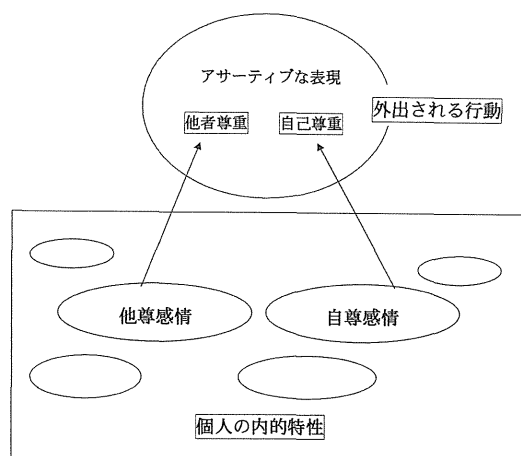


Fig. 1 アサーティブな表現における本研究の枠組み

的な表現は、不適切な自己表現とされている。非主張的な自己表現とは、自分の気持ちや考え、信念を表現しない、またはしそこなったりすることで、自ら自分の言論の自由（人権）を放棄するような表現方法である（平木，1993）。一方、攻撃的な自己表現とは、自分の言論の自由（人権）を守っているが、相手の意見を無視、軽視して、結果的に相手に自分の意見を押し付ける表現方法である（平木，1993）。さらに平木（1993）は、非主張的な表現のタイプの人は、相手に対して率直ではなく自己否定的で、自尊心が低く、いつも不安で緊張が高いという特徴をもち、一方、攻撃的自己表現のタイプの人は、相手のことを配慮しないと同時に、孤立しやすく、他者否定的で、操作的という特徴をもつと述べている。しかし、これらの特徴を示した実証的研究はみられない。自尊感情、他尊感情を用いて研究を行うことで、これらの知見に示唆を与えることが可能になると考えられる。

そこで本研究では、内的特性としての他者を尊重する側面を探索する必要があると考え、その第一歩として、他尊感情を取り上げ、この概念を新たにとらえ直し、研究1で、その個人差を測定する尺度を開発する。研究2で、他尊感情と自尊感情が3つの自己表現に与える影響を検討する。他尊感情尺度を作成するにあたり、自尊感情の定義、Hwang（2000）が提唱する other-esteem の概念をふまえ、他尊感情を、「自分以外の他者を尊敬し、価値ある人間であると考えた肯定的態度」と定義する。さらに、他尊感情は、①他者を尊重する要素を包括的に含んだ概念であること、②人格と同様、人の内側に存在する

属性であること、という2つの側面を含むものとする。

研究1 他尊感情尺度の作成

石川（2004）では、予備調査から得られた28項目を7つのカテゴリーに分類し、因子分析を行った。その結果、5因子（「価値」「親切」「非攻撃」「許容」「応援」）からなる25項目の他尊感情尺度を作成した。しかし、因子間相関、向社会的行動尺度との相関、各因子の性差において各因子ごとに異なる結果が得られた。本来、他尊感情は他者を尊重する側面を包括的に含む概念であると定義したため、異なる性質の因子を含むことは適切ではないと考えられる。さらに、他尊感情は本来行動を支える内的特性と考えられるため、行動的側面を含むことは適切ではないと考えられる。そこで、本研究では、石川（2004）の再分析調査として、行動的側面を問う項目を削除した後、単因子構造の尺度を作成することを目的とする。

予備調査

方法

1. 時期：予備調査1；2003年9月上旬。予備調査2；2003年9月中旬～10月上旬。
2. 対象：予備調査1；T大生63名 予備調査2；T大生10名、中学・高校教員6名
3. 手続き：次の4つの手順で行った。

（1）予備調査1として、他者を尊重する行動、感情とはどのようなものかを探るために、自由記述が求められた。問1では、行動面を聞く質問として「日常場面であなかが考える他者（自分以外の人）を尊重する行動とはどのような行動ですか」と尋ねた。なお、問1には「遅刻しそうな時に、相手に遅刻することを伝える」という例文が付け加えられた。問2では感情面を聞く質問として「日常場面であなかが考える他者（自分以外の人）を尊重する感情とはどのような感情ですか」と尋ねた。問2には「自分の欲望のために他人に迷惑をかけない」という例文が付け加えられた。その結果、問1では168個の記述が得られ、問2では112個の記述が得られた。自由記述による質問紙調査では、問1と問2で似たような回答がみられ、感情面と行動面の区別がつかなかったため、より詳細に探索していくために予備調査2として、面接調査を行うことにした。

（2）予備調査2としての面接調査では、予備調査1の結果抽出された内容と、自尊感情の対になる尺度であることを被調査者に説明した上で、他者を

尊重する感情について自由に回答が求められた。その結果、31個の記述が得られた。

(3) 予備調査1・予備調査2で得られた記述をもとに大学生・大学院生計4名によりKJ法が行われ項目が分類された。さらに、Hwang (2000) が提唱する other-esteem の10側面を参考に7つのカテゴリー（非攻撃的・誠実・親切・価値のある・受け入れる・他者を奨励する・許す）に分類された。Hwang (2000) の other-esteem には10側面があったが、項目をみて完全に分離することが困難な側面もあり、7つのカテゴリーに分類された。各カテゴリーから4項目ずつ抽出し、28項目の他尊感情尺度候補が作成された。

(4) 予備調査から得られた28項目について、心理学を専攻する大学院生8名に、行動的成分を含む項目はどれかと尋ね、その一致率が高かった項目(75%以上)は、行動的側面が含まれる項目と判断された。その結果8項目が削除された。削除された項目の例として、「私は人に会ったら挨拶をすることを心がけている。」(一致率100%)「私は、他人の成功も素直にほめようと思う。」(一致率88%) が挙げられる。これらの項目は、語尾が「～を心がけている」、「～と思う」という形で、思考傾向を扱っているように思われるが、「～」にあたる部分に具体的な行動の記述が含まれているため、行動的側面が含まれると判断されたと考えられる。また、「私は、できる限り相手の要求に応える。」、「私は相手が傷つくようなことはしない。」(共に一致率88%)などの項目は、語尾が「応える」、「しない」というように行動を表す動詞であるものが行動的側面と判断されたと考えられる。

本調査 方法

1. 時期：2003年11月中旬。
2. 対象：T大生247名（男子102名，女子145名）。
3. 手続き：54名には、授業終了後質問紙が配布され、集団で実施し、回収された。193名には、個別で質問紙が配布され、その場で実施してもらい、回収された。調査に要した時間は15分程度であった。回答はいずれも無記名で行われ、深く考えすぎることなく普段を思い出して正直に答えるよう教示が加えられた。
4. 質問紙の構成

(1) 他尊感情尺度；予備調査1，予備調査2から得られた記述を基に作成された28項目による尺度である。回答方法は、「以下の5段階のうち、あな

たに最もあてはまる数字に○をつけて答えてください」という問いに対し、「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. だいたいあてはまる」「5. あてはまる」の5件法で回答が求められた。本研究で分析の対象となった項目には、行動的側面が削除された20項目が用いられた。

(2) 向社会的行動尺度；本尺度は、妥当性の検討のために使用された。妥当性については、他尊感情が高ければ、向社会的行動は増えるのではないと考え、本研究では、他尊感情尺度と向社会的行動尺度との相関が検討された。向社会的行動尺度には、Rushton, Rushton, & Fekken (1981) の愛他行動尺度を参考にして、菊池 (1988) が独自に開発した、20項目からなる尺度が用いられた。本尺度は、高い信頼性と妥当性が確認されている。

本調査の結果

平均点に偏りのある3項目を削除した後、他尊感情尺度17項目について主成分分析を行った。その結果、因子負荷量が.40以下の6項目が削除された。11項目について再度主成分分析を行った結果をTable 2に示す。負荷量の高かった項目は、「私は、この世の中に必要でない人などいないと思う。」、「私は、人の個性の違いを理解し、それぞれに価値があると思う。」、「私は、どんな人も生まれてきた以上は価値があると思う。」で、7つのカテゴリーでは「価値のある」に分類された項目であった。11項目を合計した他尊感情尺度得点は、理論的には11点から55点に分布し、中間点は33点になっているが、本研究では、24点から55点に分布し、平均点(SD)は41.92 (5.80)であった。なお、11項目による他尊感情尺度は、高得点側に傾斜はしているがほぼ正規分布を示している (Fig. 2)。

信頼性、妥当性の検討 他尊感情尺度11項目においてクロンバックの α 係数を算出したところ、ほぼ十分な信頼性が得られた ($\alpha = .81$)。他尊感情尺度得点における性差の検討のために t 検定を行った。その結果、他尊感情尺度得点は、女性のほうが男性より有意に高かった ($t(245) = 3.11, p < .01, M = 40.26$ vs 42.88)。向社会的行動尺度と他尊感情尺度との間には低い値ではあるが男女共に正の有意な相関がみられた (男性： $r = .27, p < .01$ ；女性： $r = .38, p < .01$)。従って、他尊感情尺度では、ある程度の信頼性、妥当性が確認された。

研究1の考察

本研究では、11項目からなる1因子解の他尊感情尺度が作成された。第1因子の寄与率は36.05%で

Table 2 他尊感情尺度主成分分析表 (11項目)

(n = 247)

質問項目 ($\alpha = .81$)		FI	共通性	M	SD
他尊25	私は、この世の中に必要でない人などいないと思う。(価)	.74	.55	3.79	1.14
他尊21	私は、人の個性の違いを理解し、それぞれに価値があると思う。(価)	.71	.51	4.13	0.73
他尊12	私は、どんな人も生まれてきた以上は価値があると思う。(価)	.70	.49	4.02	0.94
他尊20	私は、誰にでもその人が一番輝ける場所があると思う。(受)	.63	.39	4.26	0.76
他尊13	私は、人間には優劣がないと思う。(受)	.61	.37	3.06	1.24
他尊14	私は、相手と共に喜び合うことを大切にする。(奨)	.60	.36	4.09	0.77
他尊24	私は、人に対して、常に親切でいようと思う。(親)	.54	.30	3.68	0.86
他尊28	私は、人は誰でも失敗するし、失敗することは悪いことではないと思う。(許)	.52	.27	4.23	0.73
他尊6	私は、人が目指している目標を応援しようと思う。(奨)	.50	.24	4.20	0.71
他尊2	私は、他人に対して謙虚な姿勢でいたいと思う。(誠)	.49	.24	3.99	0.89
他尊22	私は、相手が傷つくようなことはしたくない。(非)	.46	.21	3.18	1.01
寄与率 (%)		36.05			

各項目の末に KJ 法によって7つに分類したカテゴリー名を記載する。

(非), 非攻撃的; (誠), 誠実; (親), 親切; (価), 価値のある; (受), 受け入れる; (奨), 他者を奨励する; (許), 許す。

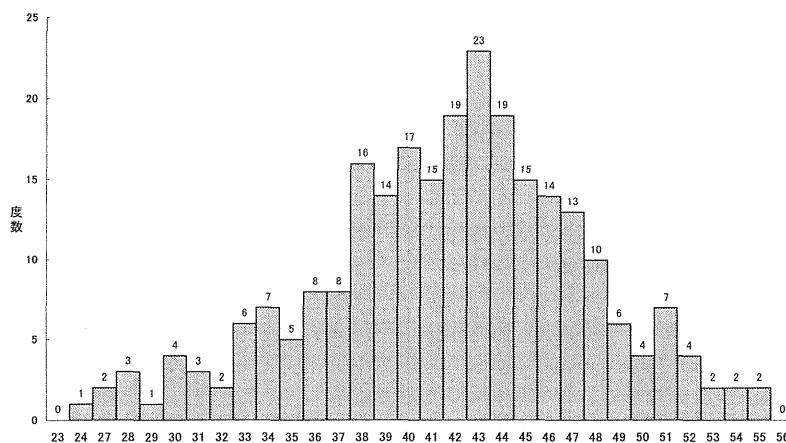


Fig. 2 他尊感情尺度得点分布

必ずしも高くはなかったが、これは内容を多岐にわたらせた結果であると考えられる。信頼性もほぼ満足な結果が得られた。他尊感情尺度には性差が確認されたが、先行研究では、共感性に関連する概念は、女性のほうが男性よりも高い傾向にある(登張, 2003; 内田・北山, 2001)。他尊感情には共感的側面も含まれるので他尊感情においても女性のほうが高くなったものと思われる。また、他尊感情は他者に対する肯定的態度であり、女子の人間関係への関与の強さ(落合・佐藤, 1996)と関連があると考えられる。向社会的行動との相関をみると、低い値ではあるが、男女共に正の相関がみられ、基準関

連妥当性の一つの根拠を示すことができた。25項目による他尊感情尺度でも男女それぞれ相関がみられたが、本研究での相関係数の値は、その値より低い値となった。向社会的行動尺度との相関の結果が25項目の他尊感情尺度よりも低くなった理由として、行動面が削除されより行動を支える内的特性を測定する尺度になったためと考えられる。他尊感情尺度において負荷量の高かった項目は、予備調査の結果から得られた7つのカテゴリーでは「価値のある」に分類された項目であった。また、5因子解での他尊感情尺度と比較すると、「価値」因子に含まれる6項目は全て、1因子解の他尊感情尺度に含まれて

いた。「価値」因子に含まれる項目は、他者を価値あるものとして尊重することを示していた因子であった。1因子解の他尊感情尺度は、「自分以外の他者を尊敬し、価値ある人間であると考えた肯定的態度」という定義の内容を踏まえた尺度であることが明らかになった。さらに、他尊感情尺度の11項目は、項目作成時の7つのカテゴリの中から少なくとも1つ抽出されており包括的であるという側面は失われていない。また、行動的側面を含む項目を削除し、より個人の内側に存在する属性を測定する尺度が作成されたことから、①他者を尊重する側面を包括的に含む概念であること、②人格と同様、人の内側に存在する特性であること、という2つの側面の内容も踏まえた尺度が作成されたと考えられる。

研究2 他尊感情、自尊感情が 自己表現に与える影響

研究2では、研究1で作成した11項目の他尊感情尺度を用いて、他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響について検討した。

方法

1. 時期・対象・手続き 研究1の本調査と同様
2. 質問紙の構成 (1) 他尊感情尺度 研究1で作成された11項目が用いられた。
(2) 自己表現尺度 渡部・稲川 (2002) が作成した24項目からなる児童用自己表現尺度を、小学校教師・中学校教師・高校教師・大学教員・大学生・大学生2名、計8名により、大学生の日常場面

で起こる出来事として適切かどうかを判定させ、その結果いくつかの項目を削除し、いくつかの項目の言葉を修正して、大学生の自己表現を測定できるように改良した。さらに青年期用アサーション尺度 (玉瀬・越智・才能・石川, 2001) の項目と照らし合わせ、内容的妥当性を検討した。その結果、15場面による尺度が構成された。回答方法は、「次にあげてある場面において、あなたはどのような行動をとりますか。最も当てはまると思う英字 (a, b, c) に1つだけ○印をつけてください。」という教示に対し、15場面ごとに、3タイプ (アサーティブな行動・攻撃的な行動・非主張的な行動) の自己表現の中から、その場面で最も自分に当てはまる自己表現を一つ選択させた。得点は、選択した回答を1点、他の回答は0点とした。

(3) 自尊感情尺度 Rosenberg (1965) が自尊感情を測定するために作成した10項目からなる尺度を、山本・松井・山成 (1982) が翻訳した尺度が用いられた。

研究2の結果

①各尺度の記述統計 (Table 3)

他尊感情尺度 結果は研究1の結果と同様である。

自己表現尺度 自己表現尺度の15項目において、3つの自己表現の記述から選択した項目の得点が1点とされ、アサーティブな表現、非主張的な表現、攻撃的な表現のそれぞれの得点を加算し下位尺度得点が算出された。それぞれの得点が高いほど、各種の自己表現を行う頻度が高いことを示す。性差をみると、アサーティブな表現では女子のほうが有意に

Table 3 他尊感情尺度、自己表現尺度、自尊感情尺度の記述統計と性差

	合計			男女別					
	N	M	SD		N	M	SD	df	t 値
他尊感情	247	41.92	5.80	男子	102	40.62	6.03	245	3.11**
				女子	145	42.88	5.46		
アサーティブな表現	247	8.62	2.43	男子	102	8.23	2.26	245	2.16*
				女子	145	8.90	2.51		
非主張的な表現	247	5.08	2.40	男子	102	4.95	2.16	245	0.69
				女子	145	5.16	2.55		
攻撃的な表現	247	1.31	1.46	男子	102	1.84	1.69	245	4.98**
				女子	145	0.93	1.20		
自尊感情	247	29.91	6.89	男子	102	30.65	7.20	245	1.46
				女子	145	29.37	6.63		

**1%水準で有意

* 5%水準で有意

得点は高かった。また、攻撃的な表現では、男子のほうが有意に得点は高かった。非主張的な表現では性差はみられなかった。

自尊感情尺度 自尊感情尺度の構造を確認するために、主成分分析によって一元性の確認を行った。その結果、項目8のみが、負荷量が低かった。先行研究においては、因子分析の結果、2因子が抽出されることもあるが、山本ら（1982）は一元性であると指摘しているため、本研究でも、項目8を削除し、1因子の尺度としてその後の分析を行うことにした。項目8を削除して、再度主成分分析を行ったところ、全ての項目が第一主成分（寄与率51.03%）に負荷量が高い（.50以上）ことから9項目を使用することとした。なお、自尊感情尺度には性差はみられなかった。

②他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響の検討

他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響を検討するために、2要因分散分析を行った。まず、他尊感情尺度得点、自尊感情尺度得点は平均値 $\pm 1/2$ SDを分割点にして、それぞれ、高・中・低群の3群に分けられた。3群のうち、それぞれ高群と低群を用いて後の分析が行われた。分散分析の結果をTable 4に示す。

アサーティブな表現の得点を従属変数とした、2（自尊感情：高群・低群） \times 2（他尊感情：高群・低群）の2要因分散分析を行った結果、他尊感情の主効果および自尊感情の主効果が有意で、共に高群のほうが低群より有意に高かった。他尊感情、自尊感情の交互作用は有意ではなかった。

非主張的な表現の得点を従属変数とした、2（自尊感情：高群・低群） \times 2（他尊感情：高群・低群）の2要因分散分析を行った結果、自尊感情の主効果のみ有意で、低群のほうが高群よりも有意に高かった。他尊感情の主効果および他尊感情、自尊感情の交互作用はいずれも有意ではなかった。

攻撃的な表現の得点を従属変数とした、2（自尊感情：高群・低群） \times 2（他尊感情：高群・低群）

の2要因分散分析を行った結果、他尊感情の主効果のみ有意で、低群のほうが高群よりも有意に高かった。自尊感情の主効果および他尊感情、自尊感情の交互作用はいずれも有意ではなかった。

研究2の考察

2要因分散分析の結果から、アサーティブな表現では、他尊感情、自尊感情がともに関連していることが示された。これまでの先行研究では、アサーティブな表現には自尊感情がプラスの影響を及ぼしている（塩見ら、2003）ことが示されていたが、本研究もそれと同様の結果が得られた。さらに、自尊感情だけでなく、他尊感情が高いこともアサーティブな表現を行うためには重要であることが示されたことは意義深い。従来のアサーション研究では、どれだけ自己表現ができるかに重点を置き、他者尊重という視点が抜け落ちていたと述べられている（用松ら、2004）。アサーティブな表現に影響を与える個人の内的特性として、自尊感情の他に、他尊感情が重要であるという本研究の結果からも、他者尊重の視点を考慮することの重要性が示唆されたと考えられる。非主張的な表現では、他尊感情の高低に関わらず、自尊感情が低いほうが非主張的な表現が高いことが明らかになった。非主張的な表現は自分から自分の人権を放棄するような自己表現であると述べられているように、自分に対して自信が持てないことが関連していると考えられることから、自尊感情が影響したものと考えられる。また、この結果から、平木（1993）が述べたように、非主張的な表現のタイプの人自己否定的で自尊心が低いという主張を支持する結果が得られた。攻撃的な表現では、自尊感情の高低に関わらず、他尊感情が低い方が攻撃的な表現が高いことが明らかになった。攻撃的な表現は相手を無視、軽視して、自分の意見を押し付けるような自己表現であると述べられているように、相手の気持ちはあまり重要ではないか、間違っていると決めつけて相手を大切にしないことが関連していると考えられることから、他尊感情が影響し

Table 4 各群における自己表現尺度の得点（SD）、及び分散分析結果

自己表現	他尊低群		他尊高群		分散分析（F 値）		
	自尊低群	自尊高群	自尊低群	自尊高群	他尊	自尊	交互作用
アサーティブな表現	7.00(2.04)	8.50(2.41)	8.71(2.35)	9.56(2.21)	8.71**	6.22*	0.48
非主張的な表現	6.18(1.83)	4.64(2.24)	5.52(2.09)	4.29(2.33)	1.23	9.31**	0.11
攻撃的な表現	1.82(1.63)	2.50(2.13)	0.71(0.90)	0.98(0.97)	20.69**	2.64	0.52
	<i>n</i> = 28	<i>n</i> = 14	<i>n</i> = 21	<i>n</i> = 41			

**1%水準で有意

*5%水準で有意

たものと考えられる。この結果から、平木（1993）が述べたように、攻撃的な表現のタイプの人は他者否定的であるという主張を支持する結果が得られた。

総合的考察

本研究において、研究1では、Hwang（2000）が提唱した other-esteem の概念を参考にして、11項目からなる1因子解の他尊感情尺度が作成され、信頼性、妥当性を検討した結果、ほぼ満足な結果が得られた。自尊感情の過度の促進による問題点から出されたこの概念は、今後ますます重要な概念となり得る可能性がある。その第一段階として、本研究で作成された他尊感情尺度を基に基礎研究を積み重ねる必要があると考えられる。本研究では、構成概念の問題として、他の概念との関連、比較はほとんどなされなかった。特に、その点に留意した基礎研究が必要となろう。

研究2では、個人の内側で行動を支える特性として他尊感情と自尊感情を用い、自己表現に与える影響について検討した。その結果、アサーティブな表現には他尊感情と自尊感情の両方が関連し、非主張的な表現には自尊感情、攻撃的な表現には他尊感情が関連している事が示された。他尊感情、自尊感情の2つの個人の内側の特性が、それぞれの自己表現に異なる影響を与えていたという結果が得られた。問題としては、他尊感情、各種の自己表現には性差がみられたが、サンプル数の都合から、男女別に分析を行うことができなかった。サンプル数を増やし、男女別に分析を行う必要があるだろう。また、アサーション研究において、アサーティブな表現には多次元性が確認されている（用松ら、2004）。濱口（1994）は、アメリカで開発された代表的な多次元尺度で取り上げられた主張行動について、①権利の防衛、②欲求の拒絶、③異なる意見の表明、④個人的限界の表明、⑤他者に対する援助の要請、⑥他者に対する肯定的な感情と思考の表明、⑦社交的行動、⑧指導的行動の8つに整理している。アサーティブな表現が多次元であることは、個人の自己表現行動のうち、得意な部分や不得意な部分についてより細かい特徴を挙げることができるだろう。これらの行動それぞれについて他尊感情、自尊感情がどのような影響を及ぼしているかを検討することで、各人に応じた援助のあり方を考えていくうえで有効であると考えられるため、アサーティブな表現の多次元性を考慮に入れた研究も必要となるだろう。

本研究では、自己表現に焦点を当てたが、他の社

会的行動についても、自尊感情と他尊感情がどのような影響を与えているか検討することは意味のあることだと考えられる。本研究から得られた結果をみてもわかるように、両側面のバランスが崩れているために、不適応的な行動が表出される可能性がある。今後は他の社会的行動についても、自尊感情と他尊感情がどのような影響を与えるか検討する必要がある。また、本研究は、大学生を対象に行われたが、Rosenberg（1979）の研究をみると、自尊感情は年齢に応じて変化している。他尊感情も年齢に応じて変化する可能性がある。他尊感情と自尊感情の発達のな変化によって、自己表現への影響が変化することかもしれないことを考えると、発達差についての検討も行う必要があると考えられる。

引用文献

- Baumeister, R.F., Smart, L., & Boden, J.M. 1996 Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Coopersmith, S. 1967 the antecedent of self-esteem San Francisco: W.H. Freeman.
- 濱口佳和 1994 児童用主張性尺度の構成 教育心理学研究, 42, 463-470.
- 平木典子 1993 「アサーション・トレーニング—さわやかな自己表現のために—」 金子書房
- Hwang, P.O. 2000 *Other esteem: Meaningful life in a multicultural society*. Philadelphia: Accelerated Development.
- 石川満佐育 2004 他尊感情と自尊感情が自己主張性に与える影響 筑波大学人間学類卒業論文（未公開）
- de Jong, P.J. 2002 Implicit self-esteem and social anxiety: Differential self-favouring effects in high and low anxious individual. *Behaviour Research and Therapy*, 40, 501-508.
- 菊池彰夫 1988 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- Midlarsky, E., Berger, M., & Kilpatrick, D. 1981 Predispositional and situational influence on change in self-esteem and helping. *Academic Psychology Bulletin*, 3, 395-399.
- 用松敏子・坂中正義 2004 日本におけるアサーション研究に関する展望 福岡教育大学紀要. 第4分冊, 教職科編, 53, 219-226.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友人との付き合い方の発達の变化 教育心理学研究,

- 44, 55-65.
- Rosenberg, M.J. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rosenberg, M.J. 1979 *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- Rushton, J.P., Chrisjohn, R.D., & Fekken, G.C. 1981 The altruistic personality and the Self-Report Altruism Scale. *Personality and Individual Differences*, 2, 293-302.
- 桜井茂男 2000 ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-70.
- 柴橋祐子 2001 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- 塩見邦雄・伊達美和・中田 栄・橋本秀美 2003 中学生のアサーションについての研究—自尊感情との関連を中心にして— 兵庫教育大学研究紀要 第1分冊, 学校教育, 幼年教育, 教育臨床, 障害児教育, 23, 69-80.
- 島井哲志 2002 攻撃性とライフスキル教育 山崎勝之・島井哲志(編)「攻撃性の行動科学 発達・教育編」12章 ナカニシヤ出版 Pp.194-210.
- 園田雅代・中釜洋子 2003 子どものためのアサーション自己表現グループワーク—自分も相手も大切に—する学級作り 日本・精神技術研究所
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 2001 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 50, 221-232.
- 登張真穂 2003 青年期の共感性の発達：多次元視点の検討 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 内田由紀子・北山 忍 2001 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究, 72, 275-282.
- 渡部玲二郎・稲川洋美 2002 児童用自己表現尺度の作成, および認知的変数と情緒的変数が自己表現に及ぼす影響について カウンセリング研究, 35, 198-207.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

(受稿9月30日：受理11月17日)